

出家及内濟候、然るに漸々四五ヶ月計寺に罷在、早々出奔行衛不相知罷在候處、私義幼年に及承罷在候、然る上者、右内濟契約之通致出家罷在候得者、毛頭申分無御座候得共、出奔還俗仕其後致帶刀國元へ罷越、隣村にて私共甚無甲斐者之様に、種々雜言廣言申候由、後日に承候間致出家亡父之無跡相弔候と申偽一件相濟契約を變じ候儀、私共見侮候仕方、父者歎し打同前之儀に、重々口惜奉存、何卒尋逢日比之鬱憤晴じ度所々相尋候、然る上は何國何方にても甚内に出會次第亡父之敵討致度心願に御座候得共、御上様へ對恐入候儀に奉存候間、甚内見掛り候は、住居見届早速御注進可申上心底に者御座候得共、理不盡成者故、其砌に至り如何相成可申哉難計、若又及刃傷にも候事御座候て、首尾能相打留め候は、口上を以趣意可申上候得共、萬一返討に相成候歟、又者相死仕候は、如何之始末候哉、難相分儀も可有御座奉存候に付、乍恐書付懷中仕罷在候、何分にも御慈悲御憐愍奉願上候以上、

寶永二巳年

御代官所

御役人中様

寺社御領所

御役人中様

御私領所

御役人中様

(傳奇作書附錄上)天主橋復仇の紀聞

寛政十二年庚申十月九日七つ半時敵討口書

下谷御徒町御徒佐々木忠三郎地借
一橋殿御徒劍術指南櫛淵彌兵衛内弟子